

タイ王国 バンパコン川

濁川の大魔神

巨大淡水エイ プラークラーベン



武石憲貴 (たけいしのりたか)

1973年、秋田県生まれ。開口健氏の『オーバ!』に影響を受け世界各地へ釣の旅に出る。ガイドにたよらず、見知らぬ土地で現地の人々と触れ合いながら手探りで怪魚を追い求めるさすらいの釣師

巨大淡水エイ・プラークラーベン。大都市バンコクからわずか80キロたらずの河水に潜んでいる (写真右が筆者)

バンパコン川の川辺で早朝からだひたすら、その「怪物」のあたりを待つていた。バンパコン川はタイ湾に注ぐ河川ではチャオプラヤ川に並ぶ大河だ。バンコクから東へ約80キロのチャチューンサオ市付近の川幅は300メートルほどあり、川辺には高床式家屋が連なっている。この東南アジア特有のどかな水辺の風景の中で怪物を思い浮かべるのは到底無理というものである。

怪物の存在を知ったのはタイの友人からのメールによってだった。それには「10人交代で睡眠をとりながら19時間も闘ったが、竿を折られて逃げられた」とか「友人が指を噛み千

切られた。毒針に刺されて1カ月入院した」など、釣師お得意のホラ話としか思えないことが書かれていた。しかし、添付写真には2畳はあるうかという、とてつもなく巨大なエイが写っていたのである。現地名「プラークラーベン」、図鑑によると最大500キロにもなるという巨大淡水エイ(学名 Himantura Chaophaya)だ。その圧倒的存在感に驚かされた僕は「いつか必ずこの怪物を釣り上げてやる」と心に誓ったのだった。

川辺に立てたカジキ釣り用の太竿は朝から微動だにしない。竿の先から極太の釣り糸が川の中央に向かって100メートルほど伸び、餌のナマズが川底深く沈んでいる。

太陽はすでにバンパコン川の真上に昇っていた。誰もが釣りをしていることさえ忘れてしまったかのようで、ゆったりとした時の流れが永遠に続くかに思えた。しかし、「その瞬間」は何の前触れもなくやってきたのである。引つ張られた糸が容赦なく出て行った。すぐに竿を持ち上げるが、力強いその泳ぎはとてつもなく魚のものとは思えず怖くなった。なんとか力任せに



力を合わせて捕らえた怪物。独りで釣り上げられなかったという敗北感は皆の笑顔で薄れていった

引き寄せるが、岸から40メートルあたりでブランクラーベンは川底に張り付いて動かなくなりました。
 ここから本当の闘いが始まったのだ。全力で川底から引きはがして釣り糸を巻き続ける。こんな釣りは初めてだ。体中の筋肉がこわばり、骨がきしみ、毛穴から汗が噴き出す。ほんの少しづつ糸はリールに巻かれてゆくが、ブランクラーベンは川底に悠然と居座ったままだ。
 闘いの終わりはいつまでたつても見えてこなかった。そこで、小船を出してブランクラーベンの真上から力を加えてみようということになった。子供がどこからか小さな小船を漕いできた。その細長く安定感のないボートに不安を感じなかったわけではないが、皆が見ている手前、勇んで乗り込んだ。そしてブランクラーベンが沈んでいると思われる場所の真上に陣取り、深く息をした後、渾身の力を込めて竿を起す。竿はいびつな弧を描き、船縁に擦りつけられ不気味な音をたてる。今にも竿が折れそうで気が気ではない。

竿を両足に挟んで力を込め続けたため、1時間の激闘の後、股間の痛みが耐えられず、交代を頼むことにした。2番手はタイ人の友人オームだ。少し贅肉はついていて屈強な体を持つたこの男が状況を打開してくれるような気がしたが、20分ほど悪戦苦闘の末、肩をおとして岸に戻ってきてしまった。その後、何人も交代で挑戦するが、いずれもなす術なく音を上げてしまった。
 そして6番手、再びオームの番になった時、最悪の事態が発生してしまう。パンツという大きな音とともにリールを竿に固定しているボルトが折れてしまったのだ。直径約5ミリのボルトは力が加わり過ぎたため、4本とも真つ二つになっていた。野次馬がどよめく中、急遽30メートルほどの糸を切り、予備のリールに巻きつけてどうにか応急処置を取ることができたが、一同にはあきらめの苦笑いが浮かんでいた。
 ところが、再開から数分後、あれだけ手をつくしても微動だにしないブランクラーベンが急に浮上してこちらに泳ぎ始めたのである。それからあつという間だった。まるで飛行機が着陸するかのように船着場のスロープに乗ったのだ。見守る群集の中

ワンポイント

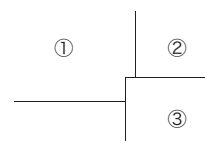
魚との駆け引き、知恵比べは釣りの楽しみの大きな要素だが、このブランクラーベンを釣るために必要なことは、「頑丈な道具」と「体力」だけ。淡水魚でありながらその重量は200キロを超えることも珍しくなく、竿とリールはカジキのトローリングに使われるような海の大物用が必要。

お勧めの仕掛けは、道糸「ディーワン12号直強力60.5kg(サンライン社)」、その先に糸を噛み切られるのを防ぐためのワイヤー製の先糸1メートルを結ぶ。針は海のジギングに使われる強力な「TUNED管ム口35号(がまかつ社)」を用いる。餌は25cm程度のナマズを豪快に1匹掛け。

釣りの時期は乾季が始まる11月から暑期の4月ころまで。釣り場となるチャーチュンサオはエビやバラマンディの養殖が盛んな田舎町だが、首都から近いこともあり、近年は工業団地化が進んでいる。市中心部までバンコクの東バスターミナルからバスで2時間半ほど。街には数件のホテルがある。

からスロープが手渡された。オームがTシャツを脱ぎ捨て、スロープの先端をくわえて水中に消えた。スロープをブランクラーベンの鼻の穴に通し、引っ張りあげようというのだ。尾には返しのような大きな毒針がついている。刺されたら抜くのは容易ではなく、刺されたままブランクラーベンが泳ぎだしたら溺れてしまう危険性もある。

数十秒が経過し、獣のような雄叫びとともにオームが水面を割った。スロープは通された。あとは引っ張りあげるだけだ。僕たちは力任せにスロープを引っ張り始めた。やじ馬の中からも子供たちが飛び出して来て加わった。それはもう釣りというより、綱引きだった。「とにかく姿が見たい。この手でブランクラーベンを抱いてみたい」ともう一人で釣り上げるとか、そんなことはどうでもよくなっていた。
 そして、とうとうブランクラーベンが姿を現した。2畳を優に超えるその大きさはまさに大魔神だ。田舎町の風景の中でブランクラーベンの存在感には目に映る全てのものを圧倒していた。皆で釣り上げたこの大魔神、東南アジアの何気ない風景の中にも衝撃はまだ存在するのである。



①釣りというのは本来楽しいはずのものだが、今回は例外。魚に苦痛を味わわされたのが初めてだ ②餌のナマズが真つ二つに噛み切られていた ③小船を漕ぎ出し、川底に張り付いたブランクラーベンの真上から闘いを挑む

